

人とのふれあいを通して、異文化のよさを追求する子ども

— 5年「世界に広げよう友だちの輪～韓国編～」の実践から —

1. 単元の構想

(1) 本単元を構想するにあたって

21世紀は国際化の時代とよばれている。この時代に生きる子どもたちが、世界中の様々な国の人たちと接する際、一人の人間として、また一人の日本人として自信をもった接し方ができるような人間へと成長していったほしいと願っている。

子どもたちがその様に育っていくための第一段階として、まず“外国の人”という意識をあまり強くもたずに接することができるようにしていくことが必要だと考える。そのためにも、外国の人と直接話をしたり、一緒に何かを作ったり、遊んだりする機会をできるだけ多くもつことが必要であろう。その様な活動を通して、子どもたちは“外国の人”という見方ではなく、例えば“イギリス人のジェームズさん”というように一人の人間としてその人をとらえ、接することができるようになると思う。この様に外国の人と親しくなっていく経験をもつことは、他の外国の人と接する場合にも生かされていくものと思う。

ただ、そのように直接交流する場をもてば、誰とでもすぐに親しくなれるものではない。その人ことや、その人の国のことについて理解していくことも必要となってくる。そこでは、単に、ある国のことについて調べ学習をするのとは違って、ある国の人との関わりの中から、その人の母国について調べてみようという意欲や課題意識をもちながら活動に取り組むことが期待できる。つまり、調べる必然性をもった活動となり、子どもの追求も力強いものとなっていくと考えるのである。

そのように外国文化について調べていくことは、自国の文化のよさにも気づいていくことにつながるものと思う。外国文化を理解する上で、必ず自国の文化が比較の対象となるはずである。外国文化との類似点や相違点を見つけることだけでなく、そのよさまで感じ取っていくことができるようにしていく必要があるだろう。そのことは、ひいては日本人としての自信をもつことにつ

ながっていくはずである。

(2) 活動の構想

大単元「世界に広げよう友だちの輪～韓国編～」は、前述した考えをもとに構想したものである。そして、その願いを実現していくための第一歩として取り組もうとした国が“韓国”である。韓国を取り上げた理由は次の3点である。

①釜山教育大学校附設初等学校との交流

本校は、約10年ほど前から釜山教育大学校附設初等学校（以下、釜山初等学校）との交流を隔年で続けてきている。今年度はその交流の年にあたり、その交流をきっかけに韓国という国について関心や意識を高めていくことができると考えた。

②韓国人の友だち尹郁子(ユン・イクコ)さんの存在
単元名にある“友だち”とは、①に挙げた釜山初等学校の子どものことだけではなく、本単元をともに活動していただくしまね国際センターの尹郁子さんをはじめ、尹さんの友だちの留学生の方など含めて考えた。尹さんとは、個人的には中学時代のからの友だちであり、そこから友だちの輪を広げていきたいと願った。

尹さんは日本で生まれ、日本で育った在日の韓国人であるが、自分が韓国人であるということに強い誇りをもった方である。尹さんと一緒に活動することによって、韓国のことに関心をもつだけでなく、韓国人としての誇りに満ちた姿を感じ取っていくことも期待ができると考えた。

③日本のとなりの国“韓国”

地理的に韓国は日本のとなりに位置している。「近くて遠い国」と形容されることもあるが、サッカー・ワールドカップの共催など関心が高まっていることなどからも、「日本に一番近い国」という意識を広げたいと考えた。また、韓国は日本の歴史上これまでに強い影響を受けてきた国の一つでもある。韓国のことを調べる中で、日本との関係についても気づいていくことができると考えた。

以上の点から韓国を取り上げ、単元を構想した。なお、本単元全体の活動計画は次頁の通りである。

大単元 世界に広げよう友だちの輪～韓国編～

小単元Ⅰ 尹さんとなかよくなる⑩

- ・チヂミを作って食べよう
- ・ユンノリなど、韓国の遊びを楽しもう

尹さんとの出会い

小単元Ⅱ 尹さんの国、韓国のことについて調べてみよう ⑭

- ・料理について調べよう
- ・ハングルについて調べよう
- ・服装について調べよう
- ・サッカーについて調べよう
- ・遊びについて調べよう など

小単元Ⅲ 尹さんの国、韓国のことについてもっと調べてみよう ⑯

- ・料理を作って食べてみよう
- ・ハングルで絵本を書いてみよう
- ・韓服を自分たちで作ってみよう

まとめよう 自分の見つけた韓国

小単元Ⅳ 尹さんたちに、自分たちが見つけた韓国について伝えよう⑯

- ・尹さんたちに、見つけたことを伝えよう。
- ・釜山初等学校の5年生にも伝えよう

釜山初等学校の友だちに
5の2からのメッセージ
を送ろう

尹さんへの思い

本単元で願う子どもの学びの姿については、次のように考えている。

- ・自分の願いをもちながら、意欲的に韓国のことを調べようとする姿。
- ・尹さんの国“韓国”のことについて、自分の調べたいことを見つけ、こだわりをもって関わり続けようとする姿。
- ・欲しいものや調べたいことが分からないときには、町の中に出かけて調べたり、尹さんに直接電話やFAXで聞いたりする姿。
- ・自分の見つけた韓国のことについて、尹さんたちに伝えていこうとする姿。
- ・自分が見つけた韓国のことについて友だちや尹さんたちなどに伝え、そこで評価されることで、自分自身に自信をもったり、取り組みを見直そうとしたりする姿。

2. 活動の実際

(1) 尹さんとなかよくなる

小単元Ⅰでは、特に、尹さんと一緒に料理を作っ

て食べたり、韓国の遊びを教えてもらったりしながら一緒に活動する時間をできるだけ多く設定した。韓国人である尹さんと子どもたちが接する機会を多くもつことによって、尹さんという人に親しみをもつことができると考えたからである。

活動の内容も、作って食べる、遊ぶといった子どもたちの欲求の高いものを取り上げることによって、韓国という国や韓国の文化に興味や関心をもち、自ら進んで韓国のことを調べてみようとする意欲をもつことにつなげていくことができると考えたのである。

○ 先生の友だちって韓国人だったの？

単元の導入にあたって、尹さんを子どもたちに紹介する際、「釜山先生の友だち」として紹介した。それは、「韓国の人」と紹介するよりも、「先生の友だちというつながりをもった人」と紹介をした方が、子どもたちが接しやすくなるであろうと考えたからである。以下、単元の導入時の授業記録である。



- T : 今日、先生の友だちと〇〇を作って食べようと言っていますが、何をやるか分かる？
- CW : ソーミンチャンプルー、カレー…
- T : 今日、作るのはこれです。(チヂミと板書)
- C : チヂミ？
- (中略)
- T : チヂミを作るために力強い助っ人に来てもらいました。先生の中学校、高校の時から友だちです。(尹さん入場)
- C : えっ、女の人？
- T : それじゃあ、自己紹介してもらいますね。
- GT : まず、韓国語であいさつしましょう。アンニョンハセヨ！
- CW : アンニョンハセヨ？ (少し戸惑い気味に)
- GT : 私の名前はユン・イクコと言います。(ハングルとカタカナ、漢字で名前の板書) 私は韓国人ですが、日本で生まれたので日本語もペラペラです。高校を卒業してから、韓国へ行って言葉の勉強などをしました。
- チヂミって見たことがある人。食べたことがある人。
- (C : 数人が挙手)
- GT : 何が入っていましたか？
- C : ニラ、ネギ。
- GT : 日本のお好み焼きのようなものだけど、ニラが入っているのでどんな味になるのか楽しみです。

実際、尹さんを教室に迎えたとき、子どもたちからは「先生の友だちって、女の人だったの？」という言葉が帰ってきた。第一印象は、普通の女

の人であり、先生の友だちであったようである。

しかし、尹さんが韓国語であいさつをされ、その後の自己紹介で韓国人であるということを知ったところから、見方が変わってきたようである。この時間のふりかえりの中で「先生の友だちが尹さんという韓国人だと知っておどろきました。」といった感想をもっている子どもも数人いたが、尹さんが日本語も上手に話されるということもあって、チヂミの作り方などを積極的に聞く姿も見られた。

○ タレがいかにも韓国って感じ



チヂミづくりの中で、チヂミは押さえつけながらできるだけうすく焼くことが大切であるといったポイントなども教わることができた。チヂミにつけるタレだけは、尹さんが作られ、それぞれの家庭によって味付けが違うことなども聞くことができた。そのタレに自分たちが焼き上げたチヂミをつけて、あっという間に食べきってしまった。この時間のふりかえりに次のようなものがあった。

つけるタレだけは、尹さんが作られ、それぞれの家庭によって味付けが違うことなども聞くことができた。そのタレに自分たちが焼き上げたチヂミをつけて、あっという間に食べきってしまった。この時間のふりかえりに次のようなものがあった。

今日は、尹さんといっしょにチヂミを作って楽しかったです。作るとき、本当は水を入れながら混ぜないといけないのに、水を入れてからかき混ぜたので、小麦粉が固まってしまったけど、教えてもらって何とか作ることができました。(こげたけど)それに、食べたらとってもおいしかったのでよかったです。チヂミはタレをつけて食べるけど、日本のお好み焼きはソースとかをつけて食べるので、韓国と日本ではちがうんだなあと思いました。
T・Y

今日はチヂミを作りました。私の班は失敗して生のまま食べることになってしまいましたが、おいしかったです。後、タレ(ヤンニョムジャン)がいかにも韓国って感じで辛かったです。なんかギョーザのタレみたいでした。また家でも作りたいです。
M・Y

T・Yはお好み焼きと比較して、その食べ方の違いから韓国と日本の違いに目を向けた。このようにチヂミを作って食べるという活動を通して、日本と韓国との違いに意識が向き始めた子どもたちは他にも数名見られた。

また、M・Yは「タレがいかにも韓国って感じで辛かった」と書いているように、韓国に対して「韓国=辛い食べ物」といったイメージをもっていたことが分かる。尹さんはニラが入っているこ



とに、韓国らしさを感じ取ってほしかったようであるが、M・Yにとっては、このタレが韓国のイメージと重なり合ったようである。このようなイ

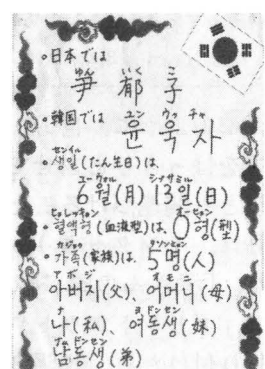
メージをもつことは、韓国という国の文化を調べていく上でとても大切な物差しとなる。そして、調べ学習を進めていく中で、このような固定的なイメージが、少しずつ変わっていくことに意味があると考えた。

(2) 私たちのことを尹さんに知ってもらおう

単元の導入における子どもたちのふりかえりの多くは、チヂミの味であるとか、チヂミの作り方に関するものであったが、中には尹さんとの今後の交流を望むものもいくつか見られた。そこで、子どもたちにはこれからの活動においても、尹さんの都合がつく限り、一緒に活動をしてもらうということを伝えた。そして、尹さんに自分たちのことをもっと理解してもらう方法はないだろうかと思いつき、話し合った結果、一人ひとりのプロフィールを綴ったものをプレゼントしようということになった。

このようなはたらきかけを行うことで、子どもたちと尹さんとの関係をより親密なものにしてこう考えた。そうすることによって、子どもたちが主体的に韓国のことについて調べようとする姿を引き出すことができると考えたのである。

また、尹さんから、右のように自分のプロフィールや連絡先などを書いてもらった。尹さんに書いてもらったプロフィールを教室に掲示しておくことによって、子どもたちと尹さんとのつながりを見える形で残しながら、意識もつなげていこうと考えたのである。



(3) 尹さんの国“韓国”について、調べてみよう

小単元Iを通して、子どもたちは韓国の食べ物、遊び以外のものにも関心を示すようになってきた。特に、尹さんが民族衣装であるチマ・チョゴリを着て来られたときには、その衣装の色の鮮やかさや形などに子どもたちの関心が向いていった。

そこで小単元IIでは、尹さんの国“韓国”につ

いて、自分で調べてみたいことをみつけて調べてみる活動に取り組んだ。

子どもたちが調べようと選んだものは次の通りである。

・韓国の食べ物（料理・お菓子の作り方）	14名
・韓国の遊び（遊びの内容、歴史など）	9名
・韓国の言葉	6名
・韓国の衣服	5名
・韓国の人のくらし	2名
・日韓ワールドカップサッカー	2名

調べたい内容が料理、遊びから言葉、衣服、くらしなどに広がっていることが分かる。時期的に日韓共催で開かれるサッカー・ワールドカップが1年後にあるということから、そこから韓国という国を調べてみたいという気持ちが生まれた子どももいるようであった。また、韓国の人のくらしを選んだ子どもは、釜山初等学校との交流があることを意識して調べようとしていたようである。

調べ活動に入る前に、「どうしてそのことを調べようと思ったのか」という理由を明らかにしておくことにした。それは、子どもたちがどのようなこだわりを持っているのかを確認するためであると同時に、子どもたちの追求が停滞してしまったときに、もう一度自分の取り組みをふりかえるためにも必要であると考えたからである。

例えば、韓国の食べ物を調べようとしたS・Eは調べる理由を次のように書いている。

私が韓国料理を選んだ理由は、最初尹さんが来られて、チヂミを作りました。それで、チヂミだけでなく、他の料理ももっと知りたくなったからです。

このように、自分が調べたいことを見つけた理由をはっきりとさせておくことで、調べた後の感想とも関連づけることができると考えた。調べ活動は、インターネットや書籍などを利用して行った。「尹さんの国「韓国」」に関することについて、プリントアウトやコピーしたものを画用紙に貼り付けたり、説明文を書き写したり、絵を描き添えたりしながらまとめ上げた。

前述したS・Eはふりかえりの中で次のように記している。

思ったのは、インターネットでいくら探しても料理ばかりで、お菓子があまり出てこなかったことです。これに関しては、まだまだインターネットにないお菓子料理があると思います。

韓国料理のコチジャンの辛さはどれ程なのかと思うし、少し食べてみたいです。

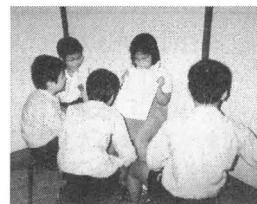
S・Eのふりかえりを読むと、インターネットだけでは調べたいことが十分に調べられないといった問題点や、実際に味わってみるといった体験が必要であったということが分かるし、子どもたちもそのような追求の意欲をもっているということが分かった。

また、他の子どもたちのふりかえりの中には、「韓国と日本のちがいが」「韓国と日本の似ているところ」など、日本と韓国を比較するテーマをもっているものもあった。韓国のことを調べる活動を通して、日本のことにも目が向いたということは、学級全体へと広がっていく価値あることであるととらえた。また、「韓国料理はキムチだけじゃない」というように、韓国という国に対するイメージが、調べていく中で少しずつ変化していったものもあった。「韓国＝辛い食べ物」といった固定観念ではなく、韓国という国に対するイメージを膨らませていくことのできる言葉がこのまとめの中にあるということに大きな価値を見出すことができた。

子どもたちのまとめの中にあるその様なよさを、子どもたち同士が気付く場として、また、韓国のことについて広く知るということをねらいとしてポスターセッションによる発表会を行った。自分の調べたことを何度も繰り返して発表したり、発表を聞いた人からの質問に答えたりするこの発表方法は、自分の考えをより明確にしていけることができるとともに、友だちの考えのよさを見つけやすい活動であると考えた。

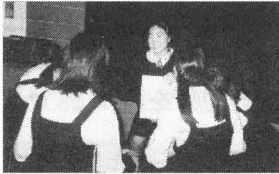
この発表会の中で、友だちの調べたことを聞いて関心の幅が広がった例として次のような姿があった。サッカーのワールドカップについて調べたM・Kはまとめの中でふりかえりを次のように書いている。

Jリーグで活躍している韓国人選手は意外とたくさんいる（ホン・ミョンボ、ユ・サン Cholなど）けど、Kリーグで活躍している日本人選手はまだいない。これからは、日本の選手もKリーグで活躍するようになると、もっと韓国との交流が広がると思う。



自分の好きなサッカーを通して、今後の日本と韓国との交流のあり方について考えているところがよさとして感じられた。この発表を聞いたK・Aは、発表を聞いた後の感想で次のように話した。

私は、サッカーに関心がないから、日本と韓国の間でこんなに大きな大会が開かれるなんて知らなかったけど、M・Kさんの発表を聞いてそれが分かってよかったです。少し、サッカーのことも見てみようかなと思いました。



このように、友だちの考えを分かり合う場において、自分の関心の幅を広げていく姿を見ることができたという点で、この発表会は大きな意味があったと考えている。

(4) 尹さんの国“韓国”についてもっと調べてみよう

1月9日付の朝日子ども新聞は、韓国特集号であった。内容も多岐にわたっており、小单元Ⅱで子どもたちが調べ活動をした内容がたくさん含まれていた。この新聞を子どもたち一人ひとりに渡し、記事の中で関心のあるものを尋ねながら、これまでの活動をふりかえっていった。そして、子どもたちが次に韓国に関わって、どのようなことがやりたいと考えているのか意識調査を行った。その結果は以下の通りである。(複数回答あり)

- | | |
|---|-----|
| ・料理作り | 10名 |
| ・調べ活動(文字・伝統行事・生活習慣・衣服・食・有名な人など) | 20名 |
| ・韓国の人(釜山初等学校の5年生)とのメール交換、文通、ビデオレター | 9名 |
| ・その他(訪韓、栽培、意識調査、新しい遊びを作る、ホームページ開設、未定など) | 13名 |

小单元Ⅱの調べ学習を進めながら、S・Eのように「まだまだ調べたりないところがある」「実際に作って、食べてみたい」というように、もっと調べたいという思いをもっている子どもたちがたくさんいた。また、「釜山初等学校の5年生とビデオレターや電子メールなどを通じて交流をしたい。」「秋に訪問した人たちを見て、日本の小学生に対してどのような印象をもったのかを聞きたい。」など、釜山初等学校の5年生との交流を願ったものも生まれてきた。

そこで、小单元Ⅲでは子どもたちのその様な思いを実現するために「尹さんの国“韓国”につい

てもっと調べてみよう」というめあてのもと、実際に料理を作る時間もとるということを伝え、活動に取り組んだ。

小单元Ⅱでは、調べ活動を主にインターネットを利用して子どもたちであったが、S・Eのふりかえりにもあったように、それだけではなかなか調べたいことが見つからないといった経験から、調べ方の見直しを図った。その結果、これまでの調べ方に加えて、尹さんや交流員の人たちに直接話をうかがってみたり、FAXで相談したりすることなどが出てきた。そのようなことも含めて、小单元Ⅲでは、子どもたちの活動を支えてもらうため、再び尹さんに協力していただくことにした。また、尹さんを通して、崔文瑄(チュ・ムンソン)さん、申美熙(シン・ミヒ)さんの二人の留学生の方にも協力をしていただくことになった。仲良くなった尹さんと再び一緒に活動ができることや、尹さんの友だちと一緒に活動をしてくださるといふことで、子どもたちの意欲も盛り上がっていった。

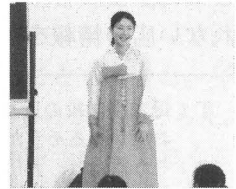
以下、2組の子どもたちの取り組みを紹介する。

①チマ・チョゴリ作りにとりくむY・Tら

Y・Tは、小单元Ⅱにおいて、次のような思いをもって調べ活動に取り組んでいた。

尹さんの着てこられた服がとてもきれいな服で、もっと韓国の衣服を調べてみたいと思った。

この記述から、小单元Ⅰで尹さんがチマ・チョゴリを着て来られた姿を見たときから、衣服に強い関心をもったようである。小单元Ⅱでは、韓国の伝統的な民族衣装について、チョゴリは上半身に着る服で、チマは下にはくスカートのようのものであることや、身分や生まれた年によって着る服が違うことなどを調べ上げていた。この調べ活動を通して、実際にチマ・チョゴリを着てみたい、自分で作ってみたいという気持ちがかかなり大きく膨らんでいたようである。



小单元Ⅲでは、Y・Tは自分でチマ・チョゴリを作って、それを着てみようと考えた。「作り方は分かるの?」という問いかけにも「インターネットで調べてみたら、あるかもしれないので。」と、特に気にしていなかった。しかし、インターネットでは作り方が見つからなかったために、

活動が停滞してしまった。

「自分の力で作りたい。」という思いを誰よりも強くもっているY・Tの願いを実現するためには実物を用意することが必要であると考えた。そこで、釜山初等学校との交流を通してチマ・チョゴリをもらっていた児童にお願いをして、数日間チマ・チョゴリを借りることにした。Y・Tにもそのことを伝えた。

Y・Tにチマ・チョゴリを渡すと、早速着替えて、一緒に活動していたN・Sと「かわいいね」と言葉を交わしていた。しばらく交代しながら着てみた後で、そのチマ・チョゴリを使って自分たちが作るチマ・チョゴリの型紙を作り始めた。

Y・Tたちは、型紙がとれたらすぐに布に当てて切り取っていくという流れをイメージしていたが、まず、布で作る前に新聞紙を使って、およその形を作ってみることを提案した。子どもたちも「こんなに大きいものを作るのは初めてだから、そうしてみる。」と言って、まず新聞紙を使ってチマ・チョゴリの試作品を作った。

この新聞紙を使った試作品作りによって、チマ・チョゴリ作りに少し見通しがもてたY・Tたちであったが、次に問題となったのは布であった。「できれば本物のチマ・チョゴリと同じようなきれいな布で作りたい。でも、こんな布は家にはないし・・・。」Y・Tたちの活動は、再び停滞してしまった。そこで、それに近い布が手に入るかもしれない店の情報を伝えた。

- T：母衣小学校の近くに、たくさん布をあつかっているお店があるそうだよ。
C：そう言えば、お母さんと行ったことがある。
C：私も。お母さんがあそこの会員だから、少し安くしてもらえるかもしれない。
C：でも、どう言ったらチマ・チョゴリで使っている布と同じのもらえるかなあ。
C：これ（チマ・チョゴリに付いていた帽子を持って）持っていったらいいんじゃないのかな。これを持っていったら、見つけてもらえるかもしれないよ。
T：あと、大きさもだね。
C：分かった。じゃあ、次の時間に行ってきた方がいいですか。
T：必要なものを準備してね。
C：はい。

次の時間、二人で実際にお店まで出かけ、本物と似た生地のものを見つけ出すことができた。

生地を手に入れ、型紙も出来上がっていたY・Tらは、この後もくもくと制作活動に取り組み始

めた。尹さんや申さんらも二人の活動を見ながら「どうやって型紙とったの?」「自分は作ったことがないのに、すごいねえ。」と二人の取り組みに驚き、はげましの言葉をかけておられた。二人はその言葉をはげみに、手縫いでチマを作り上げた。

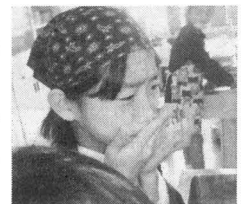


結局、チマまでしか作り上げることはできなかったが、それでも尹さんたちへのメッセージの中では「これからの休みの時間を使って、チョゴリの方も作ってみたいです。」という思いを語っていた。

②キムチ作りに取り組んだM・Kら

M・Kたち3名は、小単元Ⅱでも韓国の食べ物に強い関心もちながら調べ活動に取り組んでいた。韓国のお菓子にはどのようなものがあるのか、チヂミ以外に自分たちも作って食べることのできるものはないかななどを、インターネットや書籍などから探していた。小単元Ⅲでは、実際に作って食べる時間が保障されていることが分かっていたので、すぐに自分たちが作れそうな料理の作り方を調べ出した。小単元Ⅱで自分たちがまとめたものの中からファジョンというお菓子を選び、また、オイキムチを新たに選んでいた。

オイキムチ作りでは、尹さんから主に味付けや唐辛子の混ぜ方について、教えてもらっていたが、そのことを通して子どもたちの取り組みが大きく変化していった。



初めは自分たちで唐辛子を少しずつ入れ、箸で混ぜながら「もうこれでいいかな。けっこう辛いもんね。」と言いながらオイキムチ作りに取り組んでいたM・Kらであったが、途中で尹さんから「もっと入れなきゃ。本当は粉唐辛子だから、もっと真っ赤になるんだよ。目も痛いし、手もヒリヒリするから、ゴム手袋か何かをしてないとつけられないよ。」といった指導を受けていた。そして、尹さんが素手で唐辛子とキュウリや人参を混ぜながら「こうやって、手でもむんだよ。」と教えられると、すぐにそれを真似して取り組み始めた。しばらくすると、「目が痛い!」「涙が出てきた。」と言って大騒ぎになったが、もっとも声が上がったのはその味を確かめたときだった。「辛〜い!」「ちょっと、先生、食べてみて。辛くて食べられ

ん！」尹さんの味付けで、自分たちの好みの味から、本場の味に近づいた瞬間でもあった。この活動をM・Kは次のようにふりかえっている。

辛くするときに、七味をたくさん入れたけど、尹さんは辛くないと言って、また七味を入れて、すごく辛くなりました。だけど、尹さんは「韓国のはまだまだ赤くて、辛いよ！」と言われて、とてもおどろきました。

M・Kらの取り組みは、尹さんとともに活動したことでより本場の味に、また本場の作り方に近づくことができたと思われる。特に、尹さんが素手で唐辛子と野菜を混ぜている姿を見たことで、



子どもたちは自分たちの取り組みを見直し、実際の作り方を教わったのだろう。尹さんとの関わりの中で味だけでなく本場の作り方も、子どもたちは学ぶことができたのである。

3. 終わりに

子どもたちの活動は、小単元Ⅳにおいて、「これまでお世話になった人たちに、自分たちが調べて見つけた韓国のことを伝えよう」という形でまとめた。具体的には、ビデオレターと冊子という二つの方法で伝えることにした。

尹さんたちからは、「1年間、韓国のことについて、よく調べてきましたね。私たちも、みなさんが一生懸命調べているので、あらためて韓国のことについて勉強し直しました。これからも、韓国のことについていろいろと調べていってください。」といった言葉をいただいた。

子どもたちの追求しようという意欲は、この大単元を通してほとんど衰えることがなかった。その理由を活動の枠組みや教師のはたらきかけなどからふりかえってみたい。

①活動の枠組みについて

追求の対象として「何と出会わせるか」「どのように出会わせるのか」については、本単元を構想する上でとても重要なポイントであった。短いスパンでいえば、子どもたちが最初に出会ったものは「チヂミ」であり、その出会わせ方としては「尹さんと一緒にチヂミを作って食べる」ということであると言える。しかし、もう少し長期的な見方をするならば、小単元Ⅰそのものが、出会い

の場であったと考えられる。韓国の食べ物、韓国の遊びと子どもたちが尹さんという人を通して出会う中で追求していった対象は“韓国の文化”であったと考えるのである。

そして、そのような出会いを通して、子どもたちは自分の関心のあるものを見つけ、そこにこだわりをもちながら調べ活動へと向かっていくことができたと考える。

また、友だちの調べた内容をともに見合う場を設定したり、それぞれが違う活動をしていてもふりかえりの場をもつなど、お互いの活動の様子が分かるようにしておくことで、子どもたちの関心を広げるだけでなく、調べていく意欲なども強まったと考える。

②教師のはたらきかけについて

子どもたちの追求が停滞しかけたとき、教師がどのようにはたらきかけていくのかはとても重要なことである。Y・Tたちのチマ・チョゴリを作る活動が停滞してしまったのは、本物のチマ・チョゴリが無かったことと、それと同じような布が手元に無かったということであった。チマ・チョゴリを作りたいという強い願いがある子どもたちを支えていくために、それを解決できるようなはたらきかけをすることで、次への活動へと力強く進んで行くことができたと考える。子どもたちの強い願いを後押しする形でのはたらきかけが、本単元においてはできたのではないかと考える。

また、ゲストティーチャーとの連携によって、子どもたちの活動を活性化することもできた。子どもたちの活動の様子を教師がしっかりとらえ、どこで活動が停滞しそうなのかを予測しておくことで、ゲストティーチャーの方にどこで関わってもらえるのかを決めることができた。また、子どもたちの活動の様子についてゲストティーチャーともしっかりと連絡を取り、話し合いを進めておかなければならない。ただ単に韓国の話をしてもらうというのではなく、子どもたちと一緒に活動をする中で、分からないことは教えてほしいという願いも伝えておかななくては意味がない。そういった点で、本単元ではゲストティーチャーとの連携がうまくとれた点がとても良かったと考える。

今後は、子どもたちの学びがどのようにつくりだされていくのかを、子どもたちの追求を細かく探りながら、そこでのよりよいはたらきかけのあり方などを検討したいと考える。 (金山 剛志)